

遅れないで、きっちり穂肥をしましょう！

平成27年7月7日
那須農業振興事務所

乳白米・胴割米の発生抑制のため、
適期・適量の「きっちり穂肥」の実施を！！

前回調査（6月22日）では、平年に比べ、葉齢は進んでおり、葉色は淡く、茎数は分施体系では少なく、全量基肥体系が多くなっておりました。その後は気温は平年並み、日照量は平年に比べ少なく（71%）経過しました。

7月6日現在の生育状況は平年に比べ、分施体系では葉齢は進んでおり、草丈はやや長く、茎数はやや少なく、葉色はやや濃い状況でした。全量基肥体系では平年に比べ、草丈やや短く、茎数はやや多く、葉色は平年並みでした。



図1 水稻の姿（7月6日現在）

管内南部では最高分けつ期を過ぎて幼穂分化が始まっています。管内（大田原市）の出穂期は、5月1日移植コシヒカリで7月30日頃（平年より6日程度早い）と推定されます。※平均気温から算出した生育ステージ（DVS値）より予測

必要茎数は確保されており葉色が淡くなってきています。今後、栄養不足による乳白米及び胴割米の発生を助長させないためにも、追肥の時期と施用量は基準どおり遅れることなく、きっちり穂肥を行うことが重要です。

◎現在の生育状況

		移植日	葉齢	草丈 (cm)	1株茎数 (本/株)	茎数 (本/m ²)	葉色	葉色× 茎数	幼穂長 (mm)	出穂期	
分施	那須	27年	5/10	11.0	63.3	308	555.3	4.5	2,499	0.00	8/9予測
		昨年	5/10	10.2	62.6	28.2	508.4	3.8	1,932	0.00	8/5
		平年	5/9	10.4	58.6	-	551.6	4.1	2,279	-	8/11
		平年比・差	+1	+0.6	108	-	101	+0.4	110	-	-
	大田原	27年	5/1	11.5	66.1	24.5	465.5	3.6	1,676	2.56	7/30予測
昨年		5/1	11.6	65.8	25.3	480.7	2.9	1,394	1.16	7/29	
平年		5/2	10.8	62.5	-	537.5	3.6	1,936	-	8/5	
平年比・差		-1	+0.7	106	-	87	±0.0	87	-	-	
全量塩原	27年	5/6	10.8	62.9	26.2	502.5	3.6	1,809	0.68	8/3予測	
	昨年	5/8	11.1	68.6	26.3	504.4	3.1	1,564	0.46	8/3	
	平年	5/6	11.2	66.2	-	469.0	3.7	1,724	-	8/4	
	平年比・差	±0	-0.4	95	-	107	-0.1	105	-	-	

※那須農業振興事務所調べ（7月6日調査基準日）

分施（基肥＋穂肥）・・・那須町（管内北部）、大田原市（管内南部）

全量基肥（基肥一発）（ひとふりくん1号）・・・那須塩原市（管内南部）

◎今後の管理

(1) 水管理

間断かん水を中心とした水管理で根の活力を高めましょう。葉色が薄いほ場では、穂肥まで葉色を維持するために中干しを避け、落水期間を短くした間断かん水を行いましょう。

また、出穂前25～5日前までに低温（平均気温20℃以下）が予想される場合には、深水管理を行って幼穂を保護して耐冷性を高めましょう。

(2) 穂肥

穂肥は、葉焼け防止のため葉に露のない時に施用しましょう。茎数が多い場合、葉色が濃い場合等倒伏が懸念される場合、またはいもち病の発生が見られる場合には施用時期を遅らせましょう。なお、今年は平年に比べ茎数が少ないことから、無効茎の発生を抑制するため、適期に適量の「きっちり穂肥」を実施してください。

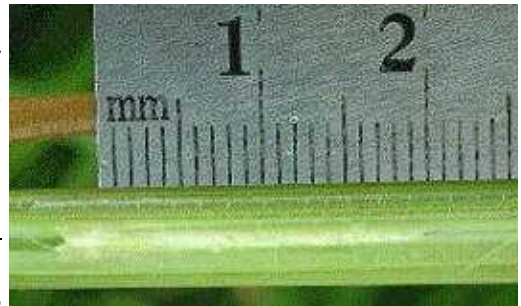


図2 出穂15日前頃

穂肥は出穂前15日（幼穂長約2cm：図2参照）頃に窒素成分で3kg/10a（BBNK-202で15kg/10a）を基準に行いましょう。葉色が薄いほ場では施用時期が遅れないよう注意しましょう。

乳白等白未熟粒や胴割粒の防止および良食味米生産のためには、生育診断による適正な穂肥・水管理により、過剰な籾数や倒伏を防止し、今後の稲体の栄養状態を好適に保って登熟の向上を図ることが重要です。

○出穂前15日に窒素成分で3kg/10aの穂肥を施用するほ場

- ・生育診断値（葉色×茎数）が生育診断指標値の範囲内（葉色3.6～4.0かつ1株茎数20～21本）。
- ・1株茎数が22本以上でも葉色が薄い（3.5以下）。

※診断値が指標値を下回る（葉色3.5以下かつ1株茎数19本以下）場合は、出穂前18日（幼穂長1cm弱）に穂肥の施用時期を早める。

○出穂前10日（幼穂長約8cm）に穂肥を施用するほ場

- ・出穂前15日の診断値が、指標値を上回っている（葉色4.1以上かつ1株茎数22本以上）。
- ・出穂前15日に葉色が3.6～4.0でも、茎数が極めて多い（1株22本以上）場合。
- ・倒伏が懸念されたり、いもち病の発生が見られるほ場。

【参考】生育診断指標値（県北部）

栽植密度が20株/m²のほ場

時期	葉色	茎数 (本/m ²)	葉色×茎数
出穂前30日	3.9～4.2	450～470	1,800～2,050
出穂前15日	3.6～4.0	400～430	1,450～1,700

時期別幼穂長

時期	幼穂長：mm
出穂18日前	8
出穂15日前(基準時期)	20
出穂10日前	80

◎施用時期は暦日で判断するのではなく、必ず幼穂長測定により出穂前日数を把握し、時期を決定してください。

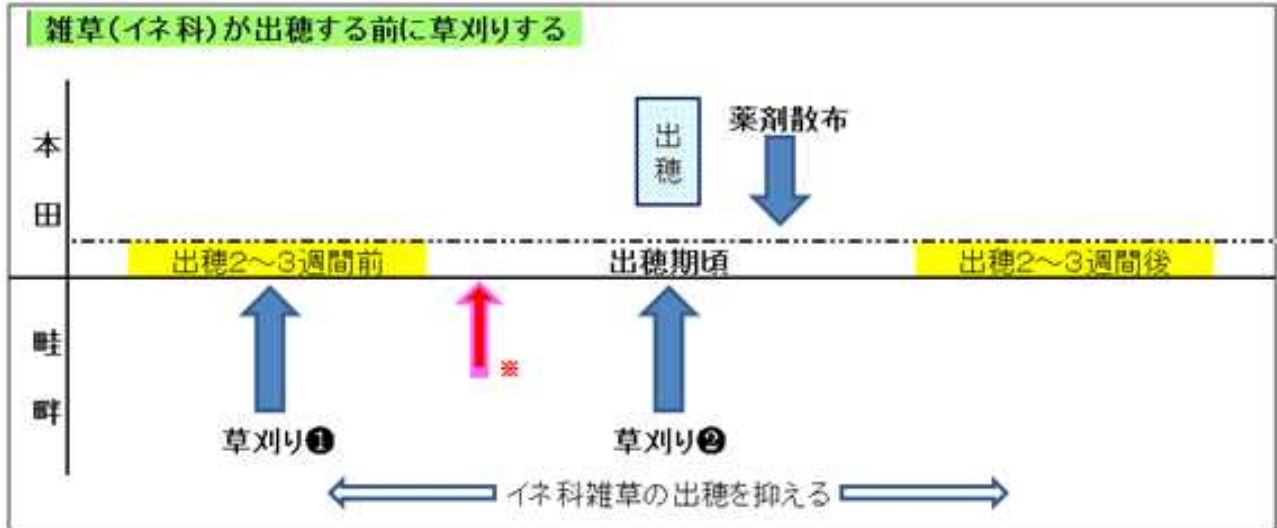
全量基肥（ひとふりくん等）には、原則として穂肥は必要ありません！

(3) 病虫害防除

①斑点米カメムシ類

カメムシは、イネ科の子実をエサとして食べていますのでイネ科雑草等の子実がなければ畦畔に寄ってきません。畦畔等の草が出穂する前に草刈りをするのが大切です。草刈りは、①水稲出穂2～3週間前と②水稲出穂期頃（草刈りしたイネ科雑草が出穂する前）の2回の除草が効果的です。

①②2回の除草が出来ない場合は、遅くとも水稲出穂の10日前までに除草を済ませましょう。また、ほ場の中のヒエやホタルイもカメムシを引き寄せますので、ほ場雑草の防除にも注意しましょう。さらに薬剤防除を行って被害を防ぎましょう。



②いもち病

県内での葉いもちの発生は少ない状況ですが、感染好適日が増えてきています。発生が確認されたほ場では早急に治療効果のある薬剤を散布し、上位葉への進展を防ぎましょう。

③稲こうじ病

発生の好適条件は、幼穂分化期～穂ばらみ期に降雨が多くて気温が低い、いもち病が多発するような年です。発生が懸念されるほ場では、適用のある薬剤を用いて適期に防除しましょう。

◎気温と積算温度の推移（日別）大田原アメダス

